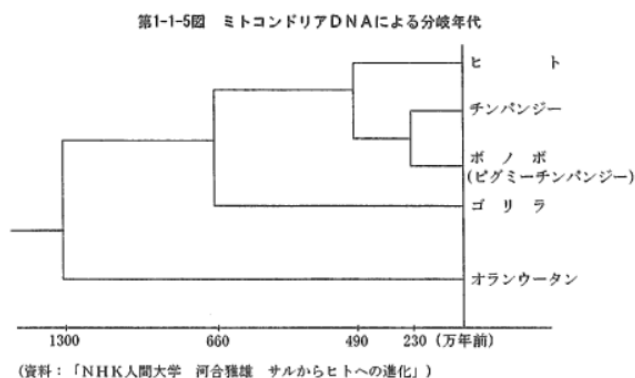


## 音声言語使用の始まりとホモ・サピエンス

### 1. ヒトの登場とホモ・サピエンス（ホモ・サピエンスへの道のり）

霊長類と類人猿と人類の関係、その分岐した年代は下図で示されている。



ホモ・サピエンス迄の道のり（新しい発見が相次ぎ、塗り替えられつつある）

猿人（700－400 万年前） 直立 2 足歩行 脳容量 400～500ml・ルーシーは 318 万年前

原人（200 万年前～ ） 〃 700～800ml・北京原人ジャワ原人

旧人（20 万年前 ） 〃 1300～1600ml・ネアンデルタール人

新人（30 万年） 〃 1500ml クロマニヨン人 現生人類

クロマニヨン人 アフリカで誕生したホモ・サピエンス・大柄で細めとされる。世界に拡散する過程で、ヨーロッパに定着したグループの代表的な存在。

現代人の祖先として現代までつながる系統

ネアンデルタール人 身体的特徴: ネアンデルタール人はよりほっそりした体つきで、現代人に近い特徴を持ちます。柔軟な雑食と大きな集団生活、芸術活動（洞窟壁画など）が特徴

ホモ・サピエンス（Homo sapiens）：

現生人類は生物学的には動物界・脊椎動物門・哺乳綱・霊長目・ヒト科・ヒト属に属する種で、「賢い人間」を意味するラテン語の言葉。霊長類サル目のヒト科には、チンパンジー、ゴリラ、オランウータンなどが属し、ヒト属は現生人類が唯一の種である。しかしこの猿人等の区分けは、最近の分子遺伝学の展開の中で、「旧人とされていたネアンデルタール人とホモサピエンスは、共存していた時期がありネアンデルタール人が 3 万 5 千年頃までに絶滅したと言う説が、分子遺伝学の近時の展開の中で有力になっている。」しかし新しい発見が相次ぎ、書き換えられる時代を迎えている。

### 2. ホモ・サピエンスの言語の特徴：二重分節の言語

人間の言語の特徴として、フランスの言語学者アンドレ・マルティネ提唱の、「二重分節」が指摘されている。この言語の性質は意味を有さない（音素）の配列関係により言語的意味

の単位（シーニョ）が構成されていて、その音素が一線をなして（線状的に）配列されつつ、互いの配列の差異により、言語的意味とリンクして意味を生成する。

この性質により、人間の使用する言語の体系は、互いに近傍的な言語的意味との間の差異によって、無限の言語的意味を括り出し、新たな生成を可能ならしめるという、人間に特徴的な言語使用の世界を切り開いたとされる。

※二重分節：文が意味を持つ最小単位（形態素・語）に分けられ（第一次分節）、さらにその意味を持つ単位が意味を持たない音の最小単位（音素）に分けられる（第二次分節）という、人間言語特有の二段階の構造を指していて、この性質により、言語は有限の音素から無限の言葉を生み出すことが可能になり、言語の経済性と創造性を両立させているという特徴を有する。（フランスの言語学者[アンドレ・マルティネ](#)の 1950 年代以降の提唱）

### 3. ホモ・サピエンスとネアンデルター人の喉の構造の違い

言語の発音、発声の過程について、人間はサル類が持つ複雑な「声帯膜」を失い、ヒトの声帯が単純な構造になったことで、安定した複雑な音声言語（話し言葉）の発達を可能にした、という点が最新の研究で明らかにされたという。

声帯を抱える喉の構造としては、「おとがい・頤」のあるホモ・サピエンスの喉頭蓋が、肺に至る空気の流れと呼吸時の空気の流れを区分けする構造になっていて、音声言語の発声機序を可能ならしめている、とされる。

※「サル類は大きな声や多様な鳴き声を出せますが、声帯膜の相互作用で振動が乱れやすく不安定なのに対し、ヒトの単純な声帯は、脳による随意的な制御と組み合わせることで、連続した音素（母音・子音）を安定して発声し、高度な言語コミュニケーションの基盤となりました。」AI 検索

※オトガイ（頤）：下顎骨（したあごの骨）の先端部分を指す医学用語で、一般的に「あご先」や「あご」と呼ばれる部分。口を閉じたり下唇を動かしたりする筋肉（オトガイ筋）が付着しており、顔の輪郭形成において重要な役割を持ち、ヒトに特有の部位である。（この部位は、発声において、下顎を上下に動かしたり口の開き具合を調整したりすることで、母音や子音の響きを分ける重要な役割を担っています。）

また、「オトガイ舌骨筋は発声にも関与しています。舌骨の位置が声帯の調整に影響を与えるため、オトガイ舌骨筋が適切に機能することで、発声の安定性が保たれます。例えば、発声時に舌骨が前方に引き上げられることで、声帯の緊張や振動が適切に調整され、クリアで安定した声を出すことができます。」

#### 4. 「おとがい・頤」とホモサピエンス

人類において「おとがい・頤」が生成へ向かい、喉と下あご、「おとがい・頤」の立体構造に変化をきたした現生人類の音声言語の表象は、複雑な 12 対ともされる多様な音素配列の差異を表象しうるのだが、その人間の音声言語表象を、可能にする部位として、身体構造としての「おとがい・頤」と理解されよう。

言語音声による発語過程を通して実現するのが音声言語コミュニケーション能力であり、ホモ・サピエンスのネアンデルタール人と差異について、発語に係る身体的（発声機能）条件、喉と舌の構造と動きにおいて、音声言語表象における劣勢があれば、集団生活の遂行においても、次第に優勢/劣勢の関係を生じた可能性が有り得るであろう。

ネアンデルタール人はホモ・サピエンスと比べて、脳容量的には劣勢は認められないのだが（前者は 1300–1600ml に対して後者は 1500ml）、言語音発声の機序に係る部位の解剖学的な「喉」、舌の構造、「おとがい・頤」の形態上の相違は、言語音発声・発音のバリエーション等に、違いを生じせしめるであろう。その違いが、音声言語コミュニケーションの質に影響を及ぼし、それがネアンデルタール人とホモ・サピエンスの共生関係において、言語的意味の多様なバリエーションを表現し、意味につなげつつの言語使用能力の差異、劣勢として、その劣勢が次第に拡大せざるを得なかったとの想定がありえよう。

#### 5. ホモ・サピエンスとコミュニケーションの位相

そこでホモ・サピエンスは、ネアンデルタール人との関係において、複雑な言語音声をもつてのコミュニケーションの質であり、その効果として集団生活の規模を拡大し、共同作業を拡大しつつ、の生活へと移行したとの想定が可能になるであろうか。時は氷河期でもあり、互いに過酷な自然条件、生存条件の中の生活、生命維持のための過酷な場面に立たされる場面も想定される。

旧人とされるネアンデルタール人とホモ・サピエンスの間は、数万年単位の長い間、共生関係にあったとされ、現在の人間の DNA の解析から、ネアンデルタール人由来の部分が証明されている。この事実は、ホモ・サピエンスとネアンデルタール人は、互いに家族関係をなしつつの歴史過程を共にしていると理解されている。ホモ・サピエンスは脳容量は 1500ml とされ、ネアンデルタール人の脳容量は同程度（脳容量（1300～1600ml）とされて、この点ではいわゆる旧人も新人も遜色は無く同容量のようである。

しかし、現前ならざる観念性、想定上、仮定の上での表現や表象について、ネアンデルタール人には言語表象の困難さの指摘もありながら、さらには言語音声の発音に係る身体機能、のどの形態進化の相違が指摘されており、言語表象上の劣勢が想定され、その違い、差異が双方の共生関係の終焉を齎した可能性が想定されるのではないだろうか。

(音声言語の始まりは、5 万年から 3 万年前頃として想定されている)

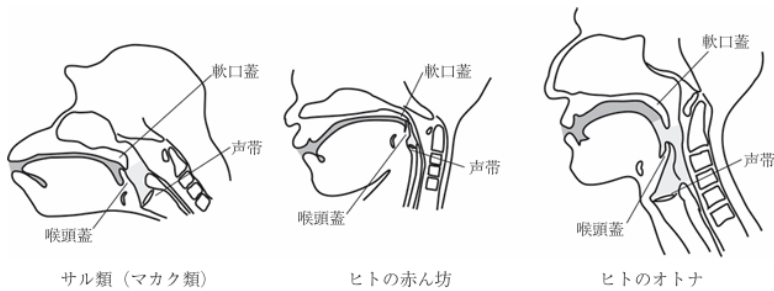


図3 サル類とヒト新生児、成人の声道形状  
濃灰色は口腔、薄灰色は咽頭腔<sup>40)</sup>。

## 6. 「おとがい・頤」の生成による言語音声への影響

(キーワード・ 集団的な言語使用 母国語言語 恣意性と線状性 重ね合い)

### i) 人間とネアンデルタール人のコミュニケーション

旧人として分類されているネアンデルタール人と、ホモ・サピエンスとの違いについて以下の3点を指摘する説も提示されている。

- ① 武器のイノベーションもネアンデルタール人はサピエンスに劣っていた。
- ② ネアンデルタールの集団はサピエンスと比べると少人数だった。
- ③ ネアンデルタール人の遺跡には、絵画や装飾がなく言語能力が発達していなかった。

おそらくは現在の言語論において、トルベツコイが『音韻論』において指摘する「12対の音素」の線状的配列関係」の構成を発語する事について、また聞き分ける能力について、ネアンデルター人との違い、差異が想定され得るであろう。

言語音の発語・発声に係わって、ホモ・サピエンスの「おとがい・頤」の構成は「ネアンデルター人とくらべると、(話し言葉)の使用において、その発声可能な音素の組み合わせにおいて、ホモ・サピエンスの優勢をもたらした可能性が想定されよう。(脳容量については、ネアンデルター人が(1300-1600ml)であり、ホモ・サピエンスは1500mlとされていて、ネアンデルタール人に明白な劣勢は認められない)

### ii) 言語の二重分節

「シーニョ」は(形態素)であり、更にその「シーニョ」は「音素」の線状的配列関係であり、それを組み合わせて文章を構成する事は統語とされる。この二重の構造(二重分節)を持つ点が言語の最大の特徴とされ、二重分節の言語を発音して、日常的に使用するとうホモ・サピエンスの音声言語コミュニケーションであり、発語に係る身体運動として理解されよう。

ヤコブソンが12対として提示した音素、その線状的な配列関係が「シーニョ」を構成、

その「シーニョ」がディスクールを達成する。音声言語を使用する話者/聴者の互いの関係をもって、人類は精神機能の深化拡大を進めつつ、人間社会の拡大への歴史的経過、展開過程を齎したものと想定される。

### iii) 人類の脳容量

この流れにおいて、人間は脳容量の増大へと至り、いわゆる旧人であっても、1300 から 1600ml の脳容量であり、ホモ・サピエンスとほぼ同じ脳容量である。しかし音声言語の複雑な音素の配列関係を構成して、意味（シーニョ）へと繋ぐ、発語発声運動において、ホモ・サピエンス以外のヒトとの間に、顎の形成に係り、ホモ・サピエンスの優位性が生じた可能性が想定され得よう。

トルベツコイの『音韻論』が明らかにした 12 対とされる数の音素の配列関係を構成する、言語音声表象である。言語使用において、発語運動を実行する、発声の機序を踏むという、身体運動の遂行課程を考えると、言語音声の発声過程において、複雑な音素配列関係を進める言語音の発声においては、ネアンデルタール人は言語音の発声を想定すると、ホモ・サピエンスに対して劣勢となり、言語的コミュニケーションの水準に差異が生じ、社会生活の場面で差異を生じる可能性は否定できないと想定される。

### iv) ホモ・サピエンスの人口規模の拡大

他のヒト属の絶滅の中で、ホモ・サピエンスはその人口規模を拡大し、5 万年前頃として想定されている、いわゆる「出エジプト」を経て、世界中に広がったとされる。音声言語表象におけるコミュニケーションの水準の「差異」、音素の線状的配列関係の構成を発語するにあたっての劣勢を生じせしめる事が想定されよう。たとえば、協働作業の遂行において、家族間のコミュニケーションにおいて、ネアンデルタール人に劣性が現出せざるを得ないと考えられよう。

### v) 「おとがい・頤」の生成への進化、

二足歩行をするヒト族において、顔面は「おとがい・頤」の生成への進化、あるいは形態の変化の経過が認められる。その「おとがい・頤」の生成による発語発声機能の進化（5 万年～4 万年前の出来事）をもって、ホモ・サピエンスにおいて、他のヒト属との間で、そのコミュニケーションの水準の差異において、集団の規模を拡大し、氷河期を越えての生存を、唯一果たし得た人類種として想定され得るのではないだろうか。

## 7. 音声言語の表現の幅

音声表象に係る発声機能の向上、「おとがい・頤」に係る発声機能の水準であろうか、言語音の表象の幅を広げたのであろうか。音素配列を成しつつの言語音表象過程におい

て、言語的コミュニケーション活動の拡大深化を引き起こし、それがより大きな集団生活へと、人間の社会文化性を進化拡大をもたらしたと想定する事もできよう。

人間の特有の能力としての音声言語使用によるコミュニケーション能力の拡大は、ホモ・サピエンスにおいて、唯一「種の継続」を果たし得たヒト族として生存を続けせしめ、その後の経過としては、集団生活の規模を拡大せしめつつ、社会文化性を進化拡大へと、文明の構築を果たし得た要因であろうか。複雑な音素配列関係の発語、発音を伴う言語使用の展開、その歴史的な展開過程であろう。

## **8. モロッコでの発見 (2017/608) について**

2025 年の現在 700 万年前から二足歩行を開始したとされるヒト族の分化の過程、歴史的経過、ホモ・サピエンスの進化の過程について、分子遺伝学の進展の中で様々な学説が書き換えられつつある時代を迎えている。その中で下記モロッコでの発見がなされた。

2017 年 6 月 8 日、アフリカ北部モロッコでの発見

※「ホモ・サピエンスと思われる最も古い骨は、ライプチヒ・マックスプランク人類進化研究所の研究者たちによりモロッコ Irhoud から発見され、31 万年前の骨と特定された (Hublin et al. *Nature* 546:289, 2017)。この発見により約 70 万年前にネアンデルタール人からアフリカで分離したサピエンスが、南、東アフリカだけでなく、モロッコの位置する地中海の西の端までアフリカ中に広く分布していたことが初めて確認された。すなわち、人口が増え、繁栄を遂げていたと思われる」

※「アフリカ北部モロッコで、約 30 万年前のものとみられる初期の現生人類ホモ・サピエンスの骨が発見され、ホモ・サピエンスはアフリカ全土広がっていたことが証明され、ホモ・サピエンスの生活地域、時期ともに（定説が）大幅に広がられている。」

**私の解釈**：聴覚機能と精神機能の連動状態を想定せざるを得ない言語使用においては、聴者/話者双方のランゲージュの重ね合い、精神機能の重ね合いにおいて、個人の言語表象活動と言うよりは、話者/聴者の会話的な言語使用の重ね合いが、その初源においても想定されるのではないだろうか。そこで私は言語使用について、コミュニケーション活動としての観点から検討をしている。

かつ脳容量の増加とともに、音声言語を表象する発声機能の発語能力について、それは 12 対ともされる音素の線状的配列関係をなぞり得る構造が、ホモ・サピエンスにおいて想定されざるをえない。そこで発声器官としての喉の構造は大きく音声言語のコミュニケーションの展開に影響がでてくるであろうか。そこで喉の構造とともに、舌の運動による、言語音声における音素の配列関係を音響として表出する事が必要であろうから、「おとがい・頤」の発達、舌の運動等の複雑な動きが必要になろうと想定されよう。

音声言語的コミュニケーションの拡大深化において、「おとがい・頤」の形成・進化の過程が、音声言語の複雑な音素配列を表象するために、必要条件として機能したのではないだろうか。（ソシュールの言語論、その再定置を試みる（要点等））